

## 『消化器がんの診断と治療—特にラジオ波焼灼術などの最新治療』

森安 史典 東京医科大学内科学第4講座 主任教授  
もりやす ふみのり

### 講演者 Profile



1975年 京都大学医学部卒業  
同内科学第一講座助手  
消化器病態学講座助教授

2000年 東京医科大学消化器内科主任教授  
日本消化器病学会  
日本肝臓学会等所属

### 講演概要

#### 1. 消化器がんの実態

日本人は消化器がんが非常に多く、死亡の割合はがんがトップで、約30%強となっています。その死因は、肺がん、胃がん、大腸がん、肝がん、膵がんの順で、5位までのうち4位が消化器がんが占めています。近年、欧米をはじめとする先進国では膵がんも急増しており、がんの発生は消化器に多いということで、検診についても重点的にされるべきだと思います。

がんには、肺がんのように治りやすいものと治りにくいものがあります。胃がん全体を見ますと、約半分の方は治ってしまいます。大腸がんも半数近くは治るでしょうし、肝がんも3分の1程度の方は治ります。しかし、膵がんが一番治りにくく、5%程度しか治らないと言われていました。したがって、治るがんについては早期発見、早期治療が基本です。しかし、進行がんで見つかる場合もあり、そのような治りにくい状態になりますと、一つの治療法ではなく、時期を見ながらいくつかの治療法をうまく組み合わせていく「集学的治療」を行うことが極めて大事になります。

#### 2. 肝がんの最新治療法

がんを局所的と医師が判断した場合は、手術治療が主要な治療法の一つであることは言うまでもありませんが、現在は手術以外の局所療法で、がんがあるところだけを治療することが可能になっています。

代表的なものにはカテーテルによる肝動脈塞栓療法や、10年程前から非常に広く普及してきたラジオ波焼灼術があります。また、現在広く

行われている「TAE」というカテーテル治療は、肝がん非常に画期的な治療法になりました。それから、陽子線や重粒子線という、非常に強力な放射線をがんに集中的に当てて治療する放射線療法もあります。しかし、これは設備に非常にお金がかかるため、数えるほどしか台数がなく、照射した部分は生きている細胞も全部死んでしまいますので、がんに限られた場所にないと当てにくいという欠点もございます。それ以外にも、強力収束超音波療法（HIFU）がございます。

#### 3. ラジオ波焼灼術

私は日本で初めてラジオ波を始めた医者の一人名なのですが、この療法は、先端が開くような針を患部に刺し、ラジオ波という電流を流して約100°Cの高温でがん細胞を死滅させます。手術に匹敵する治療法であり、同等の成績が挙げられています。

肝がんで始まったラジオ波焼灼術ですが、次第に安全性と確実性が分かってきて、現在では乳がん、肺がん、骨へ転移した場合などにも使われるようになっております。

また、ラジオ波焼灼術で治療した後に、免疫細胞療法を組み合わせると非常に有効であると考えられます。

早期発見、早期治療がすべてのがんに通じるテーマであり、複数の治療法をうまく組み合わせることで治療することが大事です。一つの治療法だけで治療するのは難しいので、こういった治療法を選択し、組み合わせることで治療を進めるのが良いか、医師とよく相談していただきたいと思っております。

“蕩蕩”がんセミナー(2008年12月6日)より抄録作成

主催: NPO・TeamNET(東京地域チーム医療推進協議会)  
共催: がん相談・“蕩蕩”他 <http://www.teamnet.or.jp>

0812B